苫小牧の夏の小型の蛾の紹介

昨年度も当体育館で「苫小牧の虫」の写真展示をおこないましたが、それは一部の方々の著しい非難と、多数の人々の圧倒的な黙殺という結果にめでたく終わったのでした。

もちろん、今年もやるのであるます。

昼間は仕事なので(真面目に働いているらしい)、虫探しはもっぱら夜。蛾ばかりです。いつの間にか「蛾屋」になってしまいました。だから今回は（も）蛾の写真ばかりです。

せっかくですから、日頃は人々の意識に上ってこない小さな蛾で……。

日本蛾類学会会員　横関丈司

◎　「チョウと蛾とはどう違うの？」という話がよーくありますが、結論から言えば、全然違いません。同じです。

「鱗翅目 Lepidoptera」という大きなグループの中では、次のように分類がなされています（いわゆる『大図鑑』体系）。

コバネガ上科 Micropterigoidea
（…）
ハマキガ上科 Tortricoidea
（…）
メイガ上科 Pylaloidea
（…）
トリバガ上科 Pterophoroidea

セセリチョウ上科 Hesperioidea
アゲハチョウ上科 Papilionoidea
シャクガ上科 Geometroidea
イカリモンガ上科 Calliduloidea
カイコガ上科 Bombycoidea
スズメガ上科 Sphingoidea
シャチホコガ上科 Notodontoidea
ヤガ上科 Noctuoidea

色変わりが蝶のグループ。この通り、「蛾の中のごく一部が特別にチョウと呼ばれている」というのが実態です。

◎　ベニスジヒメシャク Timandra recompta

中央のラインがピンク色で太いのがこのベニスジヒメシャク。

この蛾とそっくりなのにラインが茶色がかって細い「ウスベニスジヒメシャク」と「フトベニスジヒメシャク」とがいて、そっちの２つは解剖（業界では「切る」と表現します。図鑑の標本写真で胴体のないものが時々ありますが「切って」種類を確認したため）しないと区別できない仕組みです。

こういった具合にトーシローではどうしようもならない種類が蛾にはよくあります。ベニスジ類はきれいな部類の蛾なのですが、わたしは出会うたびに不愉快です。

◎　ヨモギネムシガ Epiblema foenellum

　変な名前ですが、種類としてはハマキガの仲間。翅の後ろの方に「ヒメハマキ模様（白い斜めスジ）」が見えます。

　写真は茶色の強い個体で、もっと黒いのもいます。いずれにせよ上から見たときの白い「Ω」模様が目印。こういう意味不明な個性は蛾ならではです。機能としては「鳥フン擬態」なのでしょう。

　『大図鑑』によると、幼虫は名前の通りにヨモギの根元の芯食いをやるとか。そーいえば成虫もヨモギの葉っぱの上でよく見かけますなあ。

◎　アオナミシャク Leptostegna tenerata

　アオシャクのグループや、このアオナミシャクは葉っぱの緑を通り越して、ほとんどライトブルーの翅の色をしています。

　（中型のアオシャクは実際、並のチョウよりかははるかに美しいのですが、翅の長さが２０mmを超えるので今回は割愛。来年かなあ。来年もやる気なのかというツッコミはなし。やんないかも）。

　ところで「シャクガ」の「シャク」って尺取り虫の「尺」ですよ。でも、計測なんてしないでただもこもこ歩いているだけのシャクガの幼虫もいるようです。幼虫は詳しくなくて。

◎　ドクガ（ナミドクガ）　Artaxa subflava

毛虫は別にして、蛾の姿になってから「毒」のあるものはほとんどいません。顔に当たって来ようが、ご飯に飛び込もうが問題ありません。日本人なら平気です。

ホカイドで危険なのは１種だけ。このナミドクガです。苫小牧での出現期間は７月末～８月後半までの約１ヶ月。真夏には黄色くて小さい蛾はとりあえず回避しておくのが吉です。詳しい解説を聞きたい方は横関まで。

ところで、このナミドクガ。ここ２年間アルテン～錦岡方面では見かけていません。今年はどうなるやら。「生物多様性」の観点からは、いなければいないで不安なものなのです。

◎　テンクロアツバ Rivula sericealis

芝生の周りから飛び出してくる蛾で一番多いのが、真っ白なツトガ類。次点がこの三角形のテンクロアツバです。薄茶地に黒ポチが一つずつで、簡単に見分けがつきます。

食性はイネ科の雑草食いなので生活には困らないでしょうね。条件が良ければ幾らでも増えそう。実際、多いです。

４年前にホカイドで大発生して、蛾の画像の投稿掲示版（そういうものがあるんです）や蛾好きの人たちのブログで結構話題になりました。もちろんマイマイガみたいにマスコミで取り上げられたりはしませんでしたけどね。大発生しても、困った人は一人もいなかったようですから。

◎　フタホシコヤガ Micardia pulchra

内地では春の蛾ですが、苫小牧では初夏のもの。灯火にフツーに飛来してます。少なくありません。結構います。紅色の入った美しい蛾です。まあね、小さいから「虫目」のある人しか気づかないのですけども。

「二星（フタホシ）」ってなんだかよく分からないのだけど、蛾の名前なんてたいていそんなものです。蝶に比べて思い入れや歴史がありません。学名なんてもっともっとアレで「可愛らしい小さな心臓」の意味だったりします。あまり考えないようにしましょうね。（°⊿°）

◎　クロスジノメイガ Tyspanodes striatus

「黒筋野冥蛾」。メイガといえば稲の大害虫の「ニカメイガ」が有名。田んぼには来ないメイガということで「野メイガ」と呼ばれているのでしょう。

ノメイガの仲間は苫小牧では典型的な夏蛾。翅なんて夏仕様でペラペラです。色々な模様のものがいて、中にはなかなか美しいのもいたりします。クロスジノメイガもなかなかだと思いますよ。

写真でもわかりますが、触角を背中にしょっています。こういうのはたいていメイガのたぐい。触角が額の高いトコロから生えているので、この体勢が一番楽なようです。

◎　クロシタアオイラガ Parasa sinica

緑色した蛾は結構いて、葉っぱの鮮やかな緑や、苔の深い緑色だったり。チョウは昼に活動するから関係ないのだろうけど、蛾は昼間に鳥の目をどう逃れるかが死活問題になるのです。

でもねえ、この緑色は（今の若い連中は知らないだろうけども）どうしたってお祭りのカラーひよこの緑ですよね。ということは、クロシタアオイラガはひよこに擬態していると想定されます。あまり賢い適応戦略とは思えないのだけど、個体数を減らしているわけでもないようなので、それなりには上手くいっているのでしょう。自然の驚異の一つです。

◎　ヒナシャチホコ Micromelalopha troglodyta

シャチホコガ科（「鯱鉾（しゃちほこ）」の名は幼虫のスタイルから）はわかりやすい個性のものが多くてなかなか面白いのですが、２cm以上のものがほとんど。

ヒナシャチホコは残念ながら地味な蛾です。小さいだけが取り得。シャチホコ慣れした目には異様に小さく感じられます（と言ってもマニアにしか分からないだろうなあ）。

蛾には、翅を開いてとまるものと、翅をテント型にするものとが両輪（チョウは単純に立てるものが多い）。ヒナシャチホコは後者ですが、屋根があまりにも急角度なので上から見ると何だか分からないのでした。シルエット参照。

◎　キムジシロナミシャク Asthena corculina

夏には、灯火下に白い小さい蛾が沢山飛び交います。蛾の名前を聞かれた時に困るのがこの連中です。だって白いだけで何の特徴もないでしょう。

わかるはずないですよ。

この蛾みたいにカメラで撮って何か線が浮き出てきて判断できるのはまだ上玉の部類で、「翅の裏面で…」とか「顔面の色で…」とか、「やっぱりわかりません」がいつもいつもです。

真っ白な蛾ですぐわかるのは「シロヒトリ」ぐらい。大きいし、顔がヒトリガ顔ですから。

◎　マダラツマキリヨトウ Callopistria repleta

暗がりで見るとほとんど真っ黒ですが、光を当てるとこの通りです。必然性なしに線が走っています。

遺伝子というのは何か変異が生じると、一度に複数のポイントの表現型のスイッチが入ってしまうもののようで、この蛾も何かについでにこんな模様になってしまって、なったことで別に不都合がなかったので、なんとなくこのままの模様をずるずるとやっているということらしいです。

よく観察すると、確かにヤガ模様が少し残っています。眼状紋・楔状紋は明確、腎状紋は白く流れている筋がそれでしょう。こういうのは美しいというか、単に変だというべきか。

◎　ツマベニシマコヤガ Corgatha obsoleta

鮮やかな色の蛾だけど小さいです。目で見てもよく分からない。夜目遠目だとすっかり茶色です。

フラッシュで照らしてデジカメで撮って、ＰＣのディスプレイー杯に拡大して初めてその真価が分かる、そういったタイプの蛾の一つ。むしろ、蛾はそんなのばかりです。わたしにしても、デジカメがなければ蛾なんてやってないですね。標本はすぐに色あせて別の虫になっちゃうし。

ヤガ科は地味地味地味が主流なんですが、コヤガのグループには美しいものがちらほら。でも小さいです。

アルテンでは年に数頭。沢山わいてくる蛾ではないです。